

ファツシヨン再考

早稲田大学 研究院教授・建築学
松村 秀一
Shuichi Matsumura

ハブラーケン先生逝く

二〇二三年の秋、オランダ人建築家でハウジングの世界に、「オープン・ビルディング」という新しい方法論を導入したことで著名なニコラス・ジョン・ハブラーケンMIT名誉教授・日本建築学会名誉会員が亡くなられた。享年九五歳だった。謹んでご冥福を祈りたいと思う。

日本では一九九〇年代に「S I 住宅」という考え方が広まったことがある。集合住宅の建物を、構造躯体や共用設備等から成る「スケルトン部分(S)」と、各住戸内の内装や専用設備等から成る「インフィロ部分(I)」とに明確に分けて設計

匠になっていたノーマン・フォスターやリチャード・ロジャースの設計した建築を見るのも楽しみだった。

そんなロンドンでの訪問先の一つが、フォスター設計のキャサリン・ハムネットのロンドン店だった。よくある古ぼけた煉瓦造建物の一角をぶち抜いて、奥の方にあるブリックまでガラスのブリッジをかけたアプローチも、中庭にガラス屋根をかけたようなブリック部分も、フォスターらしさ満載で心地良かったのを思い出す。

その時一緒にいた、今やリノベーションまちづくり界の大師匠になっておられる清水義次さんから「キャサリン・ハムネットは新進気鋭のデザイナー。日本にまだほとんど入ってきていないですから、ネクタイなど買って帰られたら良いと思いますよ」とアドバイスされ、ファッション音痴ながらも、キャサリン・ハムネットのネクタイを自費用に購入した。金色がかかった生地にシャンパン・グラスを持つ黒い女性の手の模様がいくつも配された独特の柄のネクタイは、今でもたまに締めることがあ

したり、施工したり、メンテナンスしたりしようという考え方だが、これは一九六〇年頃にハブラーケン先生が提唱した理論と方法に基づいている。

私事になるが、若い頃にそのハブラーケン先生とお会いしてゆつくりお話しする機会があった。一九八八年、先生の盟友で当時デルフト工科

大学教授だった故アーヘン・ファン・ランデン先生のロッテルダム近郊のご自宅に招かれた時のことだった。

当時日本はバブルの最盛期。複数の住宅系建設会社の方々が一緒だった。その内の一人が、「ハブラーケン先生が提案されていたように、マンシヨンの内装をパネル化し、住み手自身が自由に動かせるように



ノーマン・フォスター設計によるキャサリン・ハムネットのロンドン店(1988年当時)。古ぼけた建物の一角に設けられた入り口(左)とそこから奥の店舗部分にかけられた導入ブリッジ(右)。

顔の見える建設業へ

その一九八八年に新進気鋭だったキャサリン・ハムネットご本人が、サステナブルなファッシヨンの先駆者として登場する映画を観たのは、ハブラーケン先生の訃報が届いた昨秋のことだった。私的なことだが、とても運命的なものを感じた。

その映画は「Fashion

してみたのですが、ちょっとコストが高くなりすぎてその後はやっていけません。一体どうすれば良いのでしょうか？」と先生に尋ねた際、先生は一言「慎重に考えなさい」と仰った。その時の哲学者のような表情が忘れられない。

キャサリン・ハムネットのネクタイ

この一九八八年の旅は、二週間程。サッチャー政権下、大胆な規制緩和策や企業誘致によって、衰退の著しかった港湾地区を再開発したドックランズを見てみよう、ロンドンにも出向いた。既に建築界の巨

内容は観ていただかないと伝わらないが、一言で言うと、羊を育てる人、綿花を栽培する人、糸を撚る人、染色する人等々、服作りに関わる多くの人々の顔やその人たちの採っている方法が見えない今の服作りからどうにかして離れ、顔の見える服作りを実現するために辿ったパウニーさんの闘いの軌跡が描かれている。

キャサリン・ハムネットは一人で闘ってきた先駆者として映画の冒頭の方で登場する。「環境破壊と人的被害を無視して服は作れない」と語るハムネットに対して「船の方向を変えてみんなを乗船させないと」と意気込むパウニーさん。

業界の違いはあるものの、新築も解体や廃棄も、顔の见えない関係が支配的になっている今の建設業界にとっても、刺激的な若手デザイナーの挑戦と大家の気骨であった。機会があれば観ることをお勧めしたい映画である。

※映像は下記の二次元コードからご覧いただけます。

